

二分法による善悪識別は現実を裏切る。A.カミュの『ペスト』(1947,日本初訳は1950)もその「不条理」の暗喩だったはず。とすれば「転向者」の「後ろめたさ」と実存主義の流行との経脈も追求するに値することになるだろう。付言するならば最近翻訳のでたE.トラヴェルソ『一人称の過去』(宇京頼三訳・未来社)はユダヤ人迫害をひとつの軸に、あらためて「歴史記述における〈私〉」を問い直している。

新国劇で人気を得た「国定忠治」はoutlawたる義賊がいかにか体制から誅殺されるかを語る。「敗者」への共感「転向者」の内面の傷に情緒的に寄り添いつつも、「非転向者」の敗戦後のご威勢への屈曲をも密かに増幅する。先述のジャンセンは、同じ「敗者」でも坂本龍馬に日本近代化への先駆けをみた。この日米両者の位相差に、eticとemicとの差異が相乗している。

その典型が、あるいは「故郷」と「外地」との対比にも投影できようか。転向文学期の「故郷」表象は、初期の小林秀雄『故郷を失った文学』(1933)から戦後期の江藤淳の『成熟と喪失』(1967)へと変奏される批評の世界に逆照射した考察が可能だろう。だがその裏面に隠された「外地」は、満蒙開拓団に典型を見る。転向組の多くが満鉄調査部を含む国策機関に吸収された。『気まぐれ美術館』を残した洲之内徹の、戦中期の職員としての履歴にも、その振幅は探られる。

『セメント樽の中の手紙』(1926)の葉山嘉樹は引き上げの途上、長春近郊の列車車中で急逝(1945)した。それもまた、「転向」の軌跡を象徴する出来事だった。

*E. Irena Hayter, George T. Sipos & Mark Williams, *Tenkô: Cultures of Political Conversion in Transwar Japan*, Routledge, 2021. この書籍の発刊を受けた、日本比較文学会関西支部例会での国際シンポジウム(2022年7月9日)に取材し、その場での筆者の発言を備忘録とする。Kristin Ross, *Fast Cars, Clean Bodies: Decolonization and the Reordering of French Culture*, 1994も参照のこと。本記録公表については、中川成美先生はじめ参加者各位のご賛同とご助言とに深謝申し上げます。

「転向」研究へのあらたな視座

異言語間の落差から、世界文学への展望を拓く問題を紡ぎ出す

稲賀繁美

京都精華大学教員、放送大学客員教授

「転向」について、英語圏で論文集が刊行された。2017年6月にリーズ大学で3日間にわたって開催された国際会議に基づく。日本側からの寄稿者も多いが、英語圏の出版ならではの新知見や新たな切込みも見逃せない。フランス、ノルウェイおよび韓国からの参加者もあり、東欧出身者の存在も貴重だった。仔細な内容に深入りする代わりに、幾つか外部から補助線を引いてみたい。「転向」現象を世界の同時代的動向と交差させるための準備である。

近代文学史の常識としては、マルクス主義からの「転向」は佐野学と鍋山貞観が1933年6月に獄中から発した声明に起源が求められ、それは村山知義「白夜」(1934)、中野重治「村の家」(1935)、島木健作「生活の探究」(1937)に代表される一群の作品を生む。それに対しては本多秋五『転向文学論』(1957)が論争の口火を切り、吉本隆明は日本社会の近代性と封建制との矛盾を超克できなかった刻印を「転向」にみた。さらに鶴見俊輔を中心とする思想の科学による『共同研究：転向』3巻(1959-62)は、従来の「転向」と「抵抗」との二項対立の図式を乗り越え、「転向」の心理的・思想的「骨折」に創作の可能性を探った。

英語による今回の出版へのコメントとして、鈴木貴宇氏は1960年に開催された「箱根会議」に言及した。J.W.ホール、M.ジャンセン、E.ライシャワーほかの米国側出席者による類型学的比較近代化論が、遠山茂樹らの日本側参加者に支配的なマルクス主義イデオロギーの枠組みと噛み合わなかったことは、広く知られている。私見ではその背景に、冷戦下の北米側が50年代前半に経験したマッカーシー旋風の「赤狩り」の残滓は無視できまい。

また寄稿者のひとり、李珠姫氏は「転向文学」に典型的な「私小説」の「告白」は制度的順応かそれとも内面の吐露かとの問いを立てる。私見では太宰治の「告白」依存も、左翼運動での挫折からの救済をカトリック的な制度に頼った面が否定できまい。視野をそこまで拡大すれば、ドイツ占領下のフランスの事例も、「転向」現象の参照枠として活用できるだろう。「抵抗」か「対独協力」かの図式的